

## 4. 黒崎町の女性の役割とその生活

高 桑 由 紀

- I はじめに
- II 女性の労働
- III 嫁の立場
- IV 人間関係
- V おわりに

### I は じ め に

一般的に言えば、第二次大戦を節目とする日本の大きな時代の流れに伴う社会環境変化によって、人々の生活様式は複雑、多岐にと変化してきた。その過程で、特に女性には大きな社会的影響を受けたと考えられている。本稿では、そうした時代推移の中での黒崎町女性の役割、例えば就業可能な潜在労働者として、また、嫁としての立場を中心とした家庭内での地位、さらに、黒崎町という共同体内の人間関係（近所付き合い）に関して等、過去から現在にかけてどのような変遷をたどったかに注目した。そして最後に黒崎町の既婚女性の現状から、将来の在り方について考察してみたい。

なお、本稿での女性とは、一部の例外を除いて、既婚者を指す。

### II 女 性 の 労 働

黒崎の人々の生活は海と切っても切れない関係にあった。男性は船で海に出る漁師であったのに対し、海にもぐってワカメ、ノリやサザエなどを採るのは、主として女性の仕事であった。現在の70歳位の女性のほとんどは海に潜っていた経験を持っている。女性が海に潜ったのは、女性のほうが息が長く、寒さに強いという身体的理由が上げられているが、これは実証科学的ではない。端的な理由は男女間における時間的、経済的な仕事の役割分担にすぎないと思われる。4月15日がワカメ漁の一斉解禁日であり、5月頃まで採ることができる。かつては、ワカメの解禁を区長の家の太鼓で知らせていたが、現在は町中に通っている有線放送で知らせている。午前中に海に潜り、家で乾燥させ、午後大聖寺や小松の町まで歩いて売りにいっていた。これは昭和初期から戦争前までの重要な現金収入であった。つまり、女性が家計の補助者としての役割を果たしていたと判断される。そのため、海に潜れない女性は、使いものにならないと敬遠され、村内で結婚できなかった。また「黒崎へ嫁に来て海に潜れん者は、だちかん」などと言われた。現在では男性がウェットスーツを着て海に潜ることが多く、この収穫のほとんどは自家用にあてられる。しかしながら、この器具上の変化は最たる理由とは捉えられない。今日では海へ潜ることは、家

計の補助というより、むしろ趣味的な活動なのである。

この他、女性は農作業にも従事しなければならなかった。黒崎は戦前から戦後の1950年代初期まで養蚕のさかんな土地であった。1年に3回蚕を卵（「はきたて」という）から育てていた。1回目は、5月上旬から育て、6月中旬頃には繭になった。2回目は7月下旬、3回目は8月の下旬であった。はきたては1か月ほどで繭になる。これが稲の生育時期と重なるので大変忙しかった。また人が寝る場所さえ蚕に占領される状態で、衛生上の問題もあり病気にかかる人も少なくなかったというが、当時の最大の現金収入として重要なものであった。1952年から農協の融資によって、たばこ耕作が始まったのにもない、養蚕はその後2、3年の内に打ち切りになった。

また、黒崎内に3か所機場があり、そこへ学校を卒業した女の子や、すでに嫁に行った女性からも奉公へ行った。機場が休みの日は野良仕事を手伝っていた。また家事は女性の当然の仕事であり、家族より早く起き、遅く寝て、その間に掃除や洗濯などを済ませた。

黒崎の女性は働き者であるといわれ、「黒崎から嫁をもらっても、黒崎には嫁にやるな」と言われていた。この背景には経済的な安定収入の確保が困難であったことを如実に示している。これが、黒崎では集落内での結婚が多かったことに深く影響していたことが明白である。

また、1948年に起きた福井地震は、黒崎にも大きな社会的影響を与えた。この自然災害は一つの特需を発生させ、黒崎の人々に対して、集落以外での雇用の場を提供し、これを機に現金収入を求めて男性が外へ働きに出るようになった。それに続き、女性も次第に外へ働きに出るようになった。

これは過去の零細な漁業と農業から収入源が大きく変化したことを示す。つまり、世帯としては農家の2種兼業化であり、その成員個々人にとっては被雇用者としてサラリーマン的生活形態への移行であったと考えられる。

S製機やK合織、M板金、D工業など近くに雇用場所が成立したことはこの生活形態の変化に関連性があるといえる。また、豊町の果樹園に夏場パートに出る人もあり、また片山津や山代といった温泉地へパートに行く人もいる。さらに、若い人は、大聖寺を中心に加賀市内へ勤めに出る人も多い。最近では自家用車の普及もあり、通勤の範囲も広がっている。

これにより、ほとんどの世帯では農業は、農繁期には会社を休んですることになった。いっぽう、ほとんどのお年寄りは、現在でも畑で自家消費の野菜を栽培している。しかし、これは趣味や楽しみといった色合いが濃い。

福井地震の復興後、農協婦人部の呼び掛けで生活改善が盛んに叫ばれた。結婚式を質素にしたり、主婦が働きやすいように機能的に台所を整理した。また電化製品の普及により、家事の負担が軽減され、また昔に比べて子供の数も減少したので子育ての負担も減少し、自分の自由に過ごせる時間が増え、お年寄りの多くは「昔に比べると今の生活は極楽だ」と言っている。これは、男性ばかりでなく女性も外に働きに出たということから安定収入が確保され、生活水準の向上と外からの生活様式の移入が進んだ証拠であり、また女性の意識改革が起きた一環としても把握される。

### Ⅲ 嫁 の 立 場

黒崎では1937、8年頃までは、集落内での結婚がほとんどであった。他の集落からは、海に入るのを嫌って黒崎へ嫁に来る人は少なかった。

昔はかなり封建的なイエ制度と家父長の支配が存在した。どこの農村でもそうだったと思われるが、黒崎は特にその傾向が強かったのでは、という男性の声を何回か耳にした。家の中で主人は、一家の大黒柱であり、その権力は絶対的なものであった。父親は子供が気軽に話しかけることができないほどの権力を持っていた。また、嫁と姑の関係もかなり厳しかった。姑の力が非常に強く、嫁は絶対服従し、いつも姑へお伺いを立てていなければならなかったと言う。

例えば、結婚したばかりの嫁は蔵に入ることができず、自分の着物さえ自由に出し入れすることができなかった。また、米箱に手を入れることができなかった。これでは嫁が家族の一員として信用されていないかのようなのである。また台所は上流しと下流しがあったが、嫁は下に石を敷き、その上に座って炊事をする下流しのみしか使えなかった。冬はとても寒かったという。嫁は姑が亡くなるまで「杓子持ち」になることができなかった。杓子持ちとは、家事の実権を握っている人という意味で、家長制度に基づく、嫁姑の家庭内での役割分担が非常に厳格であった証拠である。そのため70歳、80歳位まで杓子を持てなかった人もいる。また、嫁は家族全員が食べて残ったものしか食べることができなかった。当時を振り返って、ほとんど女中扱いだったという声も聞かれた。

この例とは逆に婿取りの場合はどうだろうか。婿は、養子先の二親に気をつけて大変である。何をするにも我慢が必要で、「コンカ（米ぬか）3合あれば養子に行くな」という言葉もある。黒崎の人は、婿取りのことを「コンカ」と呼んで、笑い者にすることもあった。しかし、所帯分け（分家）は金がかかるので3男や4男になると、親に遠慮して婿に行くと言う人もいたという。この場合、女性の方は自分の親と同居なので気楽で、杓子持ちにもなることができた。このような例外を除けば、嫁としての立場は家庭内において、極めて弱いものであったと言える。

次に出産に関して考えてみたい。昔は嫁は実家出産するのがほとんどであった。黒崎には「三日のだんご」という慣習がある。これは子供が生まれてから3日目に嫁の実家が米の粉でだんごを作り、みそ炊きをして親戚に振る舞うというものである。これには乳が出るようにという願いが込められている。

また「七日の祝い」といって、出産後7日目に嫁の実家と嫁ぎ先両家の母親、祖母、叔母など女の親類だけを呼んで会食をする慣習がある。これは、子供を生むことは女の大役であるから、女だけが集まってお祝いをして労をねぎらうというものである。

嫁の実家が嫁ぎ先の家に孫を連れていく「孫渡し」の時は、昔はタンスに赤ちゃんから成人するまでの紋付きを入れたもの、現在では子供用のタンスに服をたくさん入れて持って行く。さらに嫁側の親戚はぶらんこなどの祝いの品を持って行く。長男にはかぶと、こいのぼりを、長女に

は雛人形を持って行くのも嫁側である。

その他、正月や盆にいろいろな物を持って行かなくてはならず、金がかかる。そのため、昔は女3人生まれれば、家が傾くといった。男の子が生まれた時の喜びは大変なものであり、お祝いも男の子誕生の時の方がより盛大であった。

その1つとして、「きねまき」がある。これは初めての男の子が生まれた年の正月に、嫁の実家が2升5合の米でもちをつくり、うちわ形にしたものに長さ15センチの柄をさしたものを持って行き、1週間程飾られた後、切り分けて食べるものであるが、これは男の子を出産した時だけである。

このような事例から判断するに、男尊女卑の風潮と、結婚を家と家の関係と見る結婚観、さらに嫁に嫁いだとしても実家に依存せざるを得なかった部分が多分にあり、それを嫁ぎ先からも期待されていた実情が浮かんでくる。

前に述べたように、嫁の立場は弱く、いつも婚家の人に対して神経をつかっており、また忙しい。骨休めのため、子供と一緒に毎年2月6日に実家に帰って泊まってくることができる習俗があり、それを「ちょうはい」といって、子供が大きくなるまで毎年続けられる。そのため、この時期を楽しみにしていたという人が多かった。

しかしながら現在では、過去のような嫁姑関係は影を潜め、3世代同居や時には4世代同居している家も未だに少なくないが、嫁と姑の仲の良い姿が多く見受けられた。これは絶対的な上下関係が無くなり、お互いに意見を交わし合えるようになり、また勤めに出ることもできる現在の生活様式を反映している。嫁が家族の一員として十分にコミュニケーションが取れて、新しい嫁としての立場が受入れられているようである。

#### IV 人 間 関 係

黒崎には、3年間のあいだに生まれた人々が組をつくる「つれ」制度というものがあり、その中で年長者を頭（かしら）、年中者を中（なか）、年少者を裾（すそ）という。つれは男女別で組が作られている。つれの活動が盛んだった頃、つれは親兄弟よりも結束が強いものであった。また小さい頃はつれの仲間をよく遊んでいたという。

今から30年以上前には「かくせつ」というものがあった。これはつれの仲間がねぎや人参などある物を持ち寄ってみんなで食べるというものである。食糧が少なかった戦時中などは相互扶助のためのものであった。現在それは温泉旅行や飲み会などに変わった。

それぞれのつれによって活動内容も異なるのだが、最近は様々な娯楽があり、大学などへ進学する人が増えたためすたれてきているが、お年寄りの中にはつれで旅行などに行くのが一番楽しいと言う人も少なくない。現在でもよそから嫁に来た人は、「つれまじり」をする。これは嫁が加入するつれの仲間を、結婚式の数日後に嫁ぎ先の家が呼んでご馳走をするというものである。

また男でも養子に來たらつれまじりを行う。

このようなつれが存在していたこと、また村内結婚がほとんどであったり、村中で協力をしなければならぬ養蚕をしていたこともあって、黒崎の人々の結束はかなり強く、近所付き合いも家族同然のようだった。

もう一つ女性の人間関係を端的に現す例として、「村姑」がある。これは、姑がいない嫁に対し、年配の村人が姑の役割をし、嫁を育てるというものである。これは、村の教育係りのような制度であり、村落共同体の一成員として必要な教育を施していたと考えられる。

このように、嫁は集落外から婚入してきた場合でも、新しく黒崎町に所属する一員として「つれ」や「村姑」という村落の人間関係組織に組み込まれ、受入れられていったと判断される。現在は、時代の流れに伴って外に働きに出たり、通婚圏の拡大などにより、近所付き合いが希薄になってきているのも確かだが、昔からの感覚やつれまじりが行われていることなどによって、結束の強い地域であるという印象を受ける。

## V お わ り に

黒崎の女性は、戦後の劇的な社会環境変化、つまり家父長的なイエ制度の崩壊や雇用機会の増加、そして、経済的な安定収入を得られるようになったこと、また家庭電気製品の普及による家事からの解放などにより、嫁としての家庭内における立場を強化してきたといえる。これらは、黒崎の生活様式を都市型に変化させただけでなく、そこに住む女性の社会的地位向上と意識改革に結び付いたといえるだろう。

将来的には、黒崎の女性の伝統的な慣習に基づく特徴は減少していき、都市型へと平均化して行く方向性には変わりがないと結論付けられる。しかしながら、その中で伝統的な生活慣習の再評価が企まれるべきであることを忘れてはならない。なぜなら、我々の生活にはその土地、地域に所属するという共同体意識が根底に欠かせないのであり、その意識こそが、社会を構成する上で重要な役割を果たしてきた。老若男女をとわず、伝統に基づく生活様式の中で、時代や社会環境に適合するもの、適合しないものを選別し、良いものは残し、ほかのものは変化を加えていく作業が必要になってくると考えられる。それは、黒崎町であれ、他の地域であれ、社会環境変化に伴う生活様式の進歩に必要なことであると考えられる。